

クンダリニーの上昇を阻む障害物について： 霊的危機も修行のうちなのか

巻口 勇一郎 常葉大学短大部日本語日本文学科*

On The Obstacles of Kundalini Awakening – The Path through Spiritual Emergency

MAKIGUCHI Yuichiro

はじめに

クンダリニー概念の諸相について拙稿（巻口 2020）で検討した。精神医学において悪性症候群（Neuroleptic Malignant Syndrome）の原因について諸説があるが、それらに対して私は悪性症候群における不明熱のクンダリニー原因仮説を提示した。もろもろの症状を引き起こすクンダリニーという原型的なエネルギーの臨床的研究の必要性は高いのに、砂上の楼閣と批判されそれ以上探求されないことは現代文明の限界であろう。そうした「スピリチュアリティと現代」の課題を含め、2021度の日本トランスパーソナル心理学／精神医学会学術大会で研究発表を行ったので、そこでの質疑応答をもとに、本稿ではクンダリニー覚醒の修行にまつわる諸問題、具体的には霊的な危機（Spiritual Emergency）をもたらす外的要因としての邪気や穢れとは何かについて、私の経験をまじえて検討したい。

クンダリニー覚醒は、悟りと同時に浄化にともなう様々な症状や感覚をもたらすといわれている。全身が細かく振動する感覚、五感

が失われ深く内面に沈潜する感覚、フルートのような高い音が聞こえる、マグマが噴き出てくる感覚、（怒りや悲しみの感情に伴う）激しい頭痛や腰痛など例をあげればきりが無い。読者の方々には、本稿を読まれる前に拙稿（巻口 2020）をお読みいただきたい。本稿の内容は生理的クンダリニー症候群（Physio Kundalini Syndrome）をもたらす諸要因についての哲学的検討を含む私見である。

クンダリニーについては以下のように拙稿（巻口 2020）で述べた。クンダリニーは、シヴァ神と別れたシャクティ女神として象徴される。女神は、頭頂で待っているシヴァ神と再び出会い、結ばれる。そうすると、二元的な迷妄の世界からの解脱を経験するといわれる。ただ、この旅はそんなにすんなりとは進まないのが常である。C.G. ユングがクンダリニー覚醒を「人生最大の冒険」と表現しているように、解脱へいたる修行の過程は、ジャングルのような未開領域の探検であり、必ずしも見通しがきく平易なものではなく、味方のみならず敵ありで、自らの限界に挑む孤独な旅である。その過程においては様々な障壁、ブロックがありそれを避けて、一時悟りのような状態を手に入れたとしても引き戻されるので、クンダリニー覚醒の要件である「持続性」に欠けると私は考えている。

* spirit8mackie@yahoo.co.jp
常葉大学短大部日本語日本文学科
〒422-8581 静岡県静岡市駿河区弥生町 6-1

クンダリニー症候群や悪性症候群における発熱をはじめとする困難な状態は、上昇するクンダリニーとそれを阻む障害物との間の葛藤や摩擦熱に起因すると考えているが、この障害物とは何なのか。それはチャクラに存在する自らの過去のトラウマやカルマ、あるいは外的な邪気や邪魔だといわれる。カルマについての考察は、仏教的なものも含め多いものの後者の外在的な障害物そのものについての検討は少ないので以下で検討したい。

クンダリニーは宇宙的悟りをもたらす広大なエネルギーとされるが、ナディーを通過して各自に悟りをもたらすので、ナディーの局所具体的なつまりがあれば、クンダリニーの目的は達せられない。修行の内的世界には精妙で広大な次元のみならず、粗大で物質世界に近い次元も存在し（例えば中医学や魔術の思想はそれを扱っている）、そこを無事に克服し通過しなければ悟りの目的地へ到達できない。

外的な要因として不可視の实在、「気」のみならず「邪気」なるものが個人（の瞑想）に影響を与えるなどという、実に怪しい考え方だと思う人は多いかもしれない。白隠禅師は禅病を患ったが、禅宗において邪気払いの祈祷が行われることはない。しかし、密教や日蓮宗では伝統的に結界や厄払いの次第、作法が存在している。東洋思想では、自他は一如であるか、切れ目なく連続しており、他からまったく切り離された自我という考え方は例外的ではないだろうか。中国の思想において経絡を詰まらせるものには外的邪気がある。ヒンドゥー教においても、シヴァ派のサドゥーのなかには、菩提樹のマラーだけでなく灰を身体各部に塗って自分をアスラとよばれる邪気から守ろうとする人たちもいる。ヒンドゥーの思想では、穢れを他から受けるということは当たり前のことで、瞑想のマスター、グルは、弟子のカルマや穢れを意図的、積極的に引き受けるのだというし、他方

弟子は師匠の傍らで瞑想し、その偉業、すなわち目に見えぬエネルギー的な恩恵に意図的にあやかるのであって、これらはある人の内的状態が他者に働きかけて影響を及ぼすという思想的前提の上に成り立っている。ジャダプール大学のニランジャン博士は、一定数の人間が悟りを得れば、あるいは悟りを開いた人がその役割で新たに生まれてくれば、それだけで周囲、世界に広く影響を及ぼすとインドでは考えられていると述べていた。逆に言えば、多数派が信仰や修行から離れてしまった現代社会においては、修行者は足を引っ張られていることになる。世俗的な社会でひとり悟るということは難易度が高い。他人の食器を使わないというインドの生活習慣は、衛生面だけではなく、他から不用意に穢れを受けないためということでもあるという。

個人の悟りも、時代や環境を含めて外的な要因に左右される。修行者が周囲の外的環境に影響を与えるのだとすれば、それ（の恩恵）を喜んで受け入れ、弟子に志願する人もいれば、それ（=場の変化）を好まず先駆的な修行者の邪魔をしたいと思うような保守的な人や存在がいておかしくはない。そもそも、意識の深層は閉じてはおらず集合的であるとも言われており、ヒンドゥー教の思想、修行システムにかんがみても、修行者にはいろいろな次元での様々な外的な働きかけ（教導や邪魔）があると考えることができる。

1. クンダリニー

インド哲学においてクンダリニーについて様々な考え方があるものの、それらに共通するところは、イダー、ピンガラ、そしてスシュムナー、これらの三本のナディーをクンダリニーは垂直方向に上昇するというところである（合田秀行の研究論文など）。ユングによれば、

クンダリーニは最も強力な原型的エネルギーであり、地下世界から魂の上昇と帰還を象徴する力である（ユング 1932=2004）。その3本のナディーはどれもが頭頂と足の裏を結ぶ縦方向に配置されていることは重要である。頭頂部にはシヴァ神が待ち受け、足の下方にはシャクティ女神（クンダリーニ）が控えている。女性性が目覚めて上昇し、シヴァ・シャクティという夫婦が再会し結ばれると、すべての二元的な世界を越えて解脱の境地が生ずるとされている（巻口 2020）。

クンダリーニ上昇にはイダー（女性性）とピンガラ（男性性）双方のバランスをとることが必要だといわれる。これを、日々の行為と結び付け、現代的な男性的、攻撃的で競争的な生活をしてはバランスがとれるわけがないと考える研究者もいる。女性でも男性でも、自分の性別と異なった性を補い内なる全体性を完成することがクンダリーニの完全覚醒には必要ということだろうか。そして、イダーとピンガラの均衡に関して修行上で必要なことは、受動的で女性的な柔らかなエネルギーの修行（女性的エネルギーはカタルシス、リラックスを促しトラウマや感情の解放に必要である）だけではなく、硬いエネルギーを能動的に出していくような修行法もまた必要だということではないかと私は考えている。後者は、自分が人に対して癒し手になるような人助けの修行でもあり、後述するような邪気を払い除ける技法や丹田を鍛える武術気功なども含まれる。女性性、男性性の統合ではないが、これら対極にある両系統の修行がクンダリーニ上昇に必要であるという点は知られていない。なお、カバラのセフィロートの体系では、峻厳の柱と慈悲の柱がピンガラとイダーに相当するように、クンダリーニのエネルギーは文化によって様々に象徴されているととらえることができるが、いかに多様に象徴されようとも、それらシンボルはどれ

もが縦の柱をもっていることに注目したい。

中国における経絡の流れはインドにおけるナディーとは異なる。しかし、経絡人形を観察すると、経絡の流れの多くは任脈や督脈を含めて縦方向になっている。確かに、経絡は垂直ではない箇所もあり斜めになっているようにも見えるが、真横の脈というものは見当たらない。このことは人間が、元来、平面的な存在ではなく、天地を結ぶ柱となり解脱できる潜在的な可能性をもっているという思想と関連性をもっている。漢文学者の白川静によれば、そもそも漢字の「経」とは「縦の意」であり正常なもの、横や斜めはすべて「よこしま」な性質の意である（白川 1987）。つまり経絡という概念自体が縦ラインのエネルギーの流れを想定している。

2. ヨーガについて

この縦のライン、背骨のスシュムナーナディーを浄化しクンダリーニを上昇させ、シヴァと再び結合することがヨーガの目的とされる。ところで、拙稿でも指摘したが、多くの心理学者はそれによってまず生活の質が向上すると主張している。例えば、インド国防省の Sureth や聖ステファン大学の Jayachander らは、138名の学生や大学生を被験者として調査をし、認知能力、心理的幸福、健康、感情のおよび社会的健康に対して、クンダリーニヨーガの実践は、クンダリーニエネルギーを覚醒させ昇華することで健康を増進し、病気を予防すると結論付けた。介入グループが、心理的健康、内的コントロール、記憶、サポート感、および不安と怒りの大幅な減少について、中間および事後の評価で統計的に有意な改善を示した（Sureth and Ramachandran, Jayachander, 2013: 7-13）。クンダリーニが目覚めれば直ちに生活の質が向上するというのである。

しかし、クンダリーニの覚醒を目指すヨーガ

は健康増進に常に役立つとは限らず、困難な状況や諸力を呼び寄せ、むしろ生活の質が低下する可能性もある（なお私の経験上、逆に目覚めたクンダリーニには師となる人に出会わせる力もあるようである）。これが統計的に表れてこないとすれば、研究者がインテンシヴなヨーガを経験した人を被験者としていない可能性が想定できる。心理学者の中村雅彦は、霊的修行者の多くが魂の暗闇を経験していると述べている（中村 2003）。インドのあるグルが、弟子のなかには修行によってかえってしんどくなったと不平をのべて、グルを恨み去る人がいると言っていた。瞑想は危険と隣り合わせであって、縦方向の上昇＝シヴァ、シャクティーの再会（修行）をもっぱら妨害するものが存在するように私には思える。釈迦、ユング、心理学者の中村雅彦はそれぞれ以下のように述べている。

良いものは高価であると世では言われている。良いことをしようとするとは必ず障りがでるものである。サダープラルディタの修行の道にも、この障りがいくたびとなく現れた。（仏教聖典協会 318-9）

（無意識における）非個人的な、非人間的な次元で起こるできごとにはすべて非常に不愉快な性質があるということがわかります。すなわち、そちらがこちらにまとわりついてくるか、こちらがそちらにしがみついてしまうか、になるのです。（Jung 1932=2004: 92）

最近では気軽に霊的な修行の世界に入る人もいるようだが、修行ごっこならいざ知らず、本気で修行するつもりなら、大きなリスクも背負っていることを覚悟してほしい。（中村 2003: 28）

自我の外の領域が、自我にまとわりついてくるような出来事とは、ひとつには非個人的な原型的エネルギーであるクンダリーニが侵入してくるということである。

また、石川勇一は次のように述べている。

悪い因と縁があるとき、修行は妨げられるか、修行をしても悪い結果を生み出す。悪い因と縁がないときに、修行に妨げは入らない。悪い因と縁があると気付いた時には、それを取り除く努力が修行を成就させるための準備の修行となる。（石川 2021: 9）

私の体験談で恐縮だが、クンダリーニという垂直方向の上昇力と、それを阻んだり下方へと引っ張る横方向の入力、すなわちカルマや外的な邪気との緊張、葛藤が存在する。それらは、クンダリーニの覚醒の強度や大きさ（マハークンダリーニ覚醒のケース）と関係しており、覚醒の強度や大きさがある場合ほど邪魔されやすく、「上昇」する力と「維持・下降」する力、この両者が有する価値観や役割の根本的相違と争いが背景にあると思われる。クンダリーニ症候群の存在は、この縦と横の力の葛藤、権力関係の帰結といってもよいのではないか。

縦方向の上昇力がクンダリーニであるが、以下では横方向の力についてさらに検討したい。宿業、カルマについては仏教以外でも広く検討されているので本稿では触れない。近年、欧米においても、瞑想における魂の暗闇のプロセスについて、急性、慢性の禅病や魔境などとして扱われ、研究報告の数も増えており関心が高まってきている。こうした研究の議論のなかでは、魔境は避ける必要があり、精神病的な特徴を伴うのであるから、それを改善する対応が必要であるということが前提となっている。改善とは、現状が良くない、それを経験すべきでな

いという否定的な評価や価値判断から導かれる対応である。だが、暗闇の経験、内外のネガティブなものとの対峙と克服なしに悟りへと向かうことができるだろうか？ それらをバイパスするのではなく、それらと面と向かい合うことこそが修行の核心であるとはいえないだろうか。以下ではクダリニーの上昇を止めてしまう外的要因としての邪気について検討してみたい。

3. 邪気とは

善悪や正邪の区分の思想について拙稿（巻口2020）で論じたが、デュルケムは、宗教は世界を聖と俗とに区分するものだと主張し、聖と俗の混交は通常タブーとされているが、聖なるものと俗なるものが定期的に接触することで、聖なるものは活気づけられるとも主張している。例えば犯罪は、意図せざる結果として道徳的な集合意識を刺激し活性化するという。人々に苦痛をもたらすものが、一見してわからない有用な働きをしており、潜在的機能を有しているという。同じ視点で、デュルケムは苦痛とは俗世へ人々をつなぎとめている紐帯が部分的に断たれた徴であると述べており、逆に快適な状態とは、この世への執着が維持されている状態ととらえることができる。インドでも、苦痛とは、この世が本当の居場所ではないことを思い出させてくれるものだという考え方がある（ヨガナンダ1983）。デュルケムは、快・不快の判断基準でものごとの良し悪し、価値を決めることはしない。苦痛にそうした潜在的な機能や価値を見出すデュルケムの立場からすれば、この世に無駄はないともいえる（ただ彼はそうはいつでも苦痛が圧倒的で過剰な状態は自殺を招き異常だとしている）。

マルセル・モースは呪術について、贈与の均衡が崩れた状況と関連させて理解している。呪

術は、あくまで世俗的なものであり社会的連帯には寄与しないものであるが、しかしながらそれは社会のある位置を占めており、社会によって承認されているとも述べ、それに一定の役割を見出している（Mauss et Hubert 1899=1983）。そして、マナのような宗教力は感染力をもち、人から人へとこだまする、その絶頂が集合的沸騰であるという（デュルケム 1912=1941, 1942）。

東洋思想（中医学）では、邪気について次のように考えている。七情といわれる喜怒哀楽は気のエネルギーを乱したり低下させたりする。先天的な要因や衣食住などの他の要因も相まって、気が虚し人体の防衛機能が低下したときに外邪が入り込んでくる。生命力旺盛で抵抗力の強い人は、邪気を攻撃する力も強く、戦いの際に膨大な熱を発生させる。一見症状が重症に見えるが、邪気が排除されると熱も収まり症状も回復する。逆に抵抗力の弱い人は、発熱や嘔吐などの症状も少なく、一見すると穏やかで軽症に見えるが、むしろ症状が長く続き邪気が体表での防衛を突破して深く侵攻してしまう。こうなると邪気に感染し染まってしまう。邪気は、自身の真気が虚した（＝エネルギーの停滞した）臓器の経絡や血液やリンパの働きを通して、五臓六腑へと入り込む。脳や心臓にまで邪気が及ぶと、身体は発汗や嘔吐、大小便や涙、鼻水や出血などあらゆるやり方で邪気を外へ追い出そうとする。邪気が入り込み、身体の防衛機能が目覚め、病後にかえって体質的な虚が改善されて健康になることもある（横田1998）。デュルケムの犯罪による集合意識の活性化についての議論に通ずるものがある。

風邪は万病のもとなどといわれるが、邪気について中国医学では未病の段階を経て様々な病の原因となると考えられている。

精神医学においては、霊的な存在にとりつかれたという訴えを主とする憑依状態や祈祷性精

神病とよばれる状態像があり、一定数の臨床研究が存在する。憑依は幻覚の内実である実体的意識性を核心とし、自他の分離を前提に、後部や下方に重く死んだ空間が表れ、「外」からやってきて、存在として押し迫ってくる。そうすると静まらずに、うるさく、騒がしくなるなどと分析する精神科医もいる。これは統合失調症の陽性症状と重なる。精神科医の中安信夫らは次のように報告している。

原始的、呪術的妄信から解放された近現代において憑依は次第に姿を消し、憑依状態は医学ではなく歴史学の対象となった。憑依は農村部で多く、中都市部では散見され、大都市部では少ない。しかし、都市部の無信仰な家族の人格変換事例（1959）、急に声変わりした長女について何者かが母にも乗り移り精神病院に救急搬送された事例（1977）を含め大都市部での臨床事例4件以上が確認されている。憑依は迷信妄想で遺物とする説は一面の真理ではあるが全面的には首肯できない。祈祷では症状が寛解せず薬物投与でよくなるケースが多い。他方、合理的な精神療法が功を奏せず、祈祷が有効な憑依のケースもわずかながら確認される（柏瀬2004、中安2004、大宮司1995）。

愛媛大学教授であり同時に臨床家として祈祷を活用し一定期間活動していた中村雅彦は、眷属や生霊や動物霊などよばれてきたものが、精神症状の原因となり主として腰や足などの下半身に痛みや重みをもたらしたり、皮膚の問題や高熱などの原因ともなりうると述べ、それぞれの邪気の特徴とそれに遭遇した際の状態について列挙している。これらの状態が臨床データに基づいているかどうかは不明であるが、中村のヒーラーとしての祈祷経験からこれらの邪気が修行を邪魔したり、病気をもたらしたりすると考えられるのだという（中村2008）。中村は、『呪いの研究』において、「闇のエネルギーほど勢いがありその力が強い」と述べる。男性

的で攻撃的な性質をもつのが邪気ではないか。そして、「修行が順調であるほど（妬みなどで足を引っ張られて）こうした存在による邪魔が入りやすい」と指摘している。修行が進んでいなければ邪魔する必要もない、修行がすすんでいるからこそ邪魔されるということはあるのかもしれない。世の中、世界平和を含め正論を述べて攻撃されるということはしばしばあることだし、瞑想修行で正しい道を進むことで攻撃されるということがあっても不思議ではない。そして、中村は、邪魔に遭遇する困難な人生それ自体が修行となる、ヒーラーになるような人には元来そういう宿命の人が多くともいう。癒しと邪魔は隣接しており、癒し人の世界には呪いが渦巻いているのだという。

このように病は気からで、邪気が様々な状態をもたらすと東洋思想では考えられており、精神医学でも憑き物を訴える精神病患者の主張を取り入れた考察がなされている。邪気との対峙によって自分がより明確になるともいえる。ただ、こうした外的な障害物とクングリニーとの関連の考察はあまりない。

クングリニーの上昇エネルギーを外的な邪気が妨害するという経験者の訴え自体があまり見当たらないが、デボラという米国女性の統合失調症経験者は、せりあがる発熱性のマグマ（＝クングリニー）に対抗する体内の不可視の存在のことを「腫瘍」と表現している（Hannah 1964=1971）（巻口2020）。

漢字の成り立ちに戻る。汚れを「払」う＝「拂」うという漢字は、手の動作によって自らに絡みついたひも、外的障害物を取り除く様子から成立したといわれる。弗にはからみついたひもを自らの手で左右に払い除けるという意味がある。そして、無事に汚れ（あるいは厄や煩惱）がはらわれた人（＝ニンベン+払う）が、佛＝仏ということになるのだろうか。

邪＝「横シマ」という言葉の語源は、縦方

向が「正当」なものにとらえられ、それを阻害する横方向のものが「不正」なものと考えられていた背景があるという。横方向・水平方向、維持の力が正統だとは捉えられていないのである。この世を現状維持する力が正統だということになれば、そうした力から見ればクンダリーニーのほうが邪気だということになってしまうが、そうではないのである。「汚」れや「邪」気の語源であるが、牙という部分について通説では人間の犬歯をさすか、二本の柱を組み木でつないだ様子を示しているという（藤堂1963）。白川静によれば邪は、牙の歯並みが乱れている様であり、衣をその折り目に従わずに引き裂くことをも言う。縦シマ、つまり縦方向の柱に対して「よこしま（横シマ）」なものが入り込み、「中央線（正道）から外れてしまう」状態が牙の意味するところである。白川静によれば、よこしまなものとは横暴、横虐、謀であり、奇邪の民の呪詛による「病原の知られていない病」に感染することである。今日感染症として位置づけられている風邪とは本来、「邪神がもたらす得体のしれない病」、底知れぬ病だということである（白川1987）。なお、インドのチャラカサムヒターにも鬼神による病という章がある。邪とは正道から外れ、正常でないありさまであり、これは不毛な結果と結びつく。川の流れがせき止められたりうねって、まがってよどむ状態をイメージし、この漢字の牙という部分が成立したということのようである。このような正当とされる縦ラインの上昇を遮る性質から、邪気はこの世への強い執着をもってとどまろうとする傾向、上昇を否定し下降することをよしとする傾向をもっているのではないか。修行を経て上昇しようとする力に対して、人を停滞させ沈める意図をもって自律的にうごくのが邪気であるということではないか。修行とは個人の努力を越えた大きな対立を背景とし、各人の修行がうまくいかないとすれば個人

的な努力不足や問題も確かにあろうが、それを越えた大きな規模での諸力の配置という背景、修行をしない多くの存在たちの妨害があるのかもしれない。信仰や修行から遠ざかった現代社会は、修行者にとって負荷になっている。民俗学では、こうした邪気について妖怪や悪鬼などとして検討してきたのだろう。

邪気には縦方向のクンダリーニーの上昇、覚醒を邪魔し阻む働きや目的があるように感じられるのであるが、こうしたことを生きているうちに経験すると、将来的に足を引っ張られる可能性についてもおのずと予期することができ、それに生前から取り組むことができるというメリットはあるのかもしれない。

4. チャクラと五重塔

横やりによる邪魔・妨害の有無やその程度、それをどの程度浄化できるのかによって、どこまでクンダリーニーが上昇できるのかが決まってくると思える。『チベット死者の書』では、魂が頭部（頭頂）から抜けることが良く、首のチャクラが詰まって手から抜ければふたたび人に生まれ変わるという記述がみられる。死にゆく人を解脱へと導くための僧による転移（ポア）の儀式も存在する。もし魂が頭部からも、手からも抜けることができないとすれば、魂はより下方の輪廻（動植物など）の道へと再生してしまうと考えられているようである。

中医学においては様々な経絡のつまりは、解脱における障害であるというよりも、気の滞りであり、未病を経て心身の病気につながると考えられており、滞った気を開き駆逐するような対処がなされる。

筆者は2019年、クンバメーラ祭の際にインドのプラヤグ（アッラーハバード）のトリベニに出向いて、川原の仮設テントに滞在した。その際に張りぼてでできた塔に出会った（写真1）。

これがある人はチャクラだという。またある人はkunda = 壺であり、悟りの境地を意味しているという。いずれにしる内的なエネルギーや境



写真1（ハリボテの塔）

地を構造物として表現したものである。私は、日本における五重塔をすぐに思い出し、この張りぼてが塔や墓石の原型ではないかと考えた。

クンダリニーがスシュムナーを上昇し悟りへと至るまでに、いくつかナディのラインが狭まった関門（=結節）があるとされている。人体に対して横方向の流れであるチャクラといわれるエネルギーの渦には異なった要素の神々が住むとともにカルマが蓄積されているという立場もあり、その箇所でクンダリニーがせき止められると、脇へそれたクンダリニーがそのチャクラに対応する性質を過剰に強めてしまうともいわれている。下方のチャクラでクンダリニーが強まると、例えば性欲が強くなるなどと言われており、修行はスムーズなプロセスではなく様々な難関を越えなければいけないことを示している。

五重塔は天を目指してそびえたつが、仏教では、五大（地水火風空）を五重塔と結び付けている。これらの建築物は、悟りへ至る過程を表現していると思われる。

拙稿（巻口 2020）で指摘したが、クンダリニーは、不随意的であり自動的に上昇する力として感知される。ユングによれば、それは魂

の帰還欲求であり、人のマインドはクンダリニーに抵抗しようとするが、最後にはそれをあきらめてクンダリニーにゆだねるに至るといふ（ユング 1932=2004）。それほどの持続的な力をクンダリニーがもっているということである。また他方でクンダリニーそれをせき止める力をもったものもあり、それらの葛藤が自分の中で生じていることを経験者は観察するものがクンダリニー症候群の状態なのではないだろうか。気功やヨーガなどの身体技法に親しもうとする動機として、体調や気分的な問題を改善したいというものがあげられる。エネルギーの世界は広大であり、夏目漱石が『草枕』のなかで述べているような、旅先で即席に編んだ仮の枕でぐっすり眠ることもままならない、住みにくい不自由なこの俗世とは違う、義理人情を忘れて、自由な、魅力をもった世界ではないかと期待したり憧れることもあろう。しかし、瞑想修行をすすめていくと、しだいに深くに潜んでいた自らのネガティブな記憶、トラウマや無意識的な原型的な力が浮上したり、さらには修行を邪魔するような外部からやってくるまさによこしまなエネルギーを（新たな次元の義理人情）感じる出来事も起こりうる。私を含めて平凡な我々が、そうした困難なしに垂直方向への悟りへと難なく深まっていくようなことがあるだろうか。

現実生活で避けて後回しにしてきたことに、修行のなかで違ったかたちで向かい合うことになる。刑務所に入ることは避けなければならないことであるが、刑務所から出所してかえって生まれ変わったような人になっていることもある。現実生活では、問題を抱えれば環境を変え、逃避することも可能である。しかし、修行上の問題は自らの心の内面で生起する事象であり、それに遭遇したからといって逃げ出すことは難しい。修行上出てきた内面の感覚とは、逃げずに正面から向かい合わねばならな

い。瞑想などの修行は、現世の生活と同様に、あるいはそれ以上に困難や危険と覚悟が伴うものであるという認識をもつことは重要であり、修行におけるクダリニー症候群、禅病、魔境や憑依などの困難経験は決して稀で例外的な出来事や他人事とは言えない。

5. 修行における障害物について

瞑想修行がうまくいかないときの感覚には、いろいろな種類のものがあり得る。修行自体が苦行の様相を呈すれば物理的に様々な危険を伴うが、日常生活のなかで自然発生的な霊的な危機または覚醒を経験するケース (SSAs., Spontaneous Spiritual Awakenings) も近年実証的に報告されていることから、一見して温和に見えるヨーガの学習であってもリスクを伴うと考えておくべきである (Taylor 2013)。

クダリニー症候群との関連では、何かに (ナディーが) ふさがれてしまいエネルギーが先 (上方) へ進めずに体内に充満する不快な感覚が第一であり、そのほかに、米俵を背負わされて足を引っ張られ全体的に重たくあるいは冷たくなったり (反対に火照ったり)、なにか自分が狭い範囲に閉じ込められてしまった感覚が、しばしば列挙される。以下にその状況を検討してみたい。

修行における障害物や邪魔について、まずは自分の執着とか煩惱といわれるもの自体がそれであるといえる。私は、インドへ出向いて巡礼をしたり、何人かの教師について日々の修行を続けてクダリニーの流れをよくするためにしていた修行の結果、執着とこだわりが減ったというのが正直な感想である。何年か修行を続け、気づいたら我慢なくベジタリアンになっており、また自動車や服装についてのこだわりもなくなっており、クダリニーの流れも改善された。私に関しては日々戒律を守り、強い意志

で禁欲を続け、その結果安定的にこだわり、執着が減ったということではない。さらに自分を見つめてみると、単に現世への執着が悟りへの執着に変化しただけなのかもしれない。表面的になくなったように見えても、簡単に執着はなくなるのであろう。ただ、背骨のつまりは、自分の現世的なこだわり、執着が減ったと同時に軽減し、物質的な現世への執着が自らが作り出す横方面のブロックとなりクダリニーの上昇をふさいでいたということに後になって気づいた。ともかく、普段の自分の現世的なこだわりや煩惱を払い除けることなく、ナディーの背骨のつまりだけをとるということは不可能ではないか。そして、クダリニーのルートをふさぐブロックが取れると、なおさらクダリニーが上昇し、さらなるブロックを燃やしこだわりが少なくなったというサイクルがあるかもしれない。

6. スタートラインへ戻される

私は、修行が進みクダリニーのつまりがとれて頭にまで上がってきて、「順調だな」と心地よく感じていたころ、突如外部からやってきた邪魔な存在、エネルギーのふさがりを感じるようになった。修行の道は一直線ではなく、ループであり山あり谷ありなのである。

自分のこだわりやトラウマがブロックになることは否応なしに思い知らされてきたが、外から働きかけてくる邪魔 (中国でいう外因の邪) が手ごわいことを修行のプロセスではじめて知った。もちろん外的なものは自分の内的なものとの関連性をもっている。外的な邪魔は、自らの心身の弱点、左右のアンバランス等を補強して圧迫してくる。よほど自らが浄化を進め、自らを肯定し (=緊張を解いて)、食欲や怒りや悲しみを手放して純粹になっていないと (病気になるなどして) 邪魔には負けてしまう、勝ち

目はないと感じたのである。クンダリーニの不
完全な覚醒を邪気が知らせてくれるのである。
ともかく、ある日、ほしいものが少なくなり、
平和な日々だなどと思っていた矢先に突然エネ
ルギーの流れが滞るような、外から圧迫され
るような感覚を覚え、身近な人に相談すると
邪気は気にしないことが一番といわれたが、
気にしないで済むレベルの違和感ではなかつた。

拙稿（巻口 2020）で検討したように、悪
性症候群といわれ統合失調症をはじめとする
精神病の治療過程で発熱することがしばしば
あり、その発熱によって精神症状が軽快し
たりすることがあるという点を検討した。ク
ンダリーニは感覚的に熱いエネルギーでも
あり、悪性症候群など筋原性ではない不明熱
と関連する精神病に関与しているのではない
か。統合失調症の記録である『デボラの世界』
の主人公は、体内の「腫瘍」と表現される
ような障害物（実際の腫瘍ではない）と、
体内をせりあがってくるマグマとの緊張
関係を証言していた（Hannah 1964）。

私はクンダリーニ症候群と思われる状態を
これまで経験してきた。インドに滞在する
などして過去のブロックの解消に焦点をあ
てた修行を経て、その流れは徐々に改善
してきた。クンダリーニエネルギーが流
れる量が大きくなったこともある。それを、
カシにアシュラムをもつヴィシュヌ派の
グルのサイマタジは喜んでくれていた。

私は邪気というものを長年意識してこ
なかつた。修行を始めたかなりあとにな
ってクンダリーニの上昇を阻む粘着性の
ひもや団子状のエネルギーが肩に巻き
付いたり背中に入り立ちふさがる感
覚をもった。邪気は、物質に近く、境
界と形態があり、局所的なものでは
ないかと感じた。私があるときアパ
ートの自室で瞑想していると、ク
ンダリーニの流れをせき止め修行を
邪魔しやめさせようとする圧迫感
をもつように

なつた。糊のように体に付着して、
執拗に妨害してくるかのような冷
気を下半身に感じ、主に手足が冷
え症になってしまった。それは腕に
巻き付いたり、体表に粘着したり、
しまいには体内のナディーの位置
に入り込んだように感じられたので、
修行を妨害する意図があると私は
解釈した。この重たく頑固な粘着
性のひもや玉は、皮膚表面など身
体に近い部位に感じられ、クンダ
リーニのエネルギーの流れをふさ
ぐ力があつた。その鉛のような重
くねばねばした玉の感覚とは、ま
さにあのデボラさんが言ったよう
にマグマに対抗する「腫瘍」と表
現することがふさわしいとも感じ
た。この感覚を打ち砕いて駆逐す
るのに、従来の悟り系の瞑想、柔
らかく細やかな、あるいは女性
的なマントラエネルギーのみでは
まったく何ともならず、同種の力
強い男性的なエネルギーを時と
して局部的に対抗させること、も
しくは物理的な対処（局所に対
処をする法具や鳴り物や香りもの
など）を用いることが有効かつ必
要であつた。ただし、その際にも、
従来のクンダリーニ瞑想の一般
的な修行は有効であつた。外的な
邪気は、自らがもともと抱える弱
点を促したり強化するかたちで覆
いかぶさってくるように感じられ
たので、自らの弱点やトラウマの
浄化も同時に進めることが有効
だと考えたのである。単純ではな
いようだ。中国やインドでは、邪
気はいたるところに存在し、道を
歩いていただけの何らかかわり
のない人にも付着することがあり、
だれからも恨まれることがない
善良な人物であるからといって、
穢れや呪いの魔の手から逃れる
ことはできないといわれる。修行
の邪魔は、石川勇一が言うような
基本的には各人がもっている因
縁ではあるが、穢れ、蟲、鬼、邪
気などよばれる霊的な障害は、
各人の善悪の行いとは関係なく、
偶然的に人に影響を及ぼすこと
があるといわれている（なお無
関係な人を意図的に巻き込むこ
とで成立する魔術もヨーロッパ
の魔術の歴史のなか

には存在している)。インドではシヴァ神が蛇を首に巻きつけたり、体に這わせていたりする絵画を見かける。あまり一般的ではないが、修行の結果、強大な力をもつに至ったシヴァに、仙人たちが嫉妬し、危機感をもって蛇の呪いをかけたという説もある。シヴァ神のもつ宇宙的で破壊的な力に対する、人間界からの報復的な呪いが蛇として描かれるのかもしれない。中村雅彦も、宗教の世界ではサイキック戦争、暗闘が行われており、優れた力量をもつヒーラーが同業者から脅威と判断されて呪詛で攻撃されるという風説や、宗教組織を脱会しようとする信者を組織的に呪うことがあるのだという(中村2003: 18-43)。また、インドには他人の用いた食器や衣服を使用しないという習慣が存在するが、その他にも衣食住の様々な文化や社会的な制度についても、そこには穢れを関係のない他者から不用意に受けないようにするという目的が隠れている。白隠禪師は修行途中禪病で苦しんだ。釈迦は悪魔マーラーに何年も修行を邪魔されるという関門を通り抜けた。ソクラテスやイエス、親鸞や日蓮も、その力強い宗教的な態度ゆえに、かえって平穏とはいいがたい困難な人生を送った。重大な過失がなくても、一定の力量に達した、強度と持続性のある修行者は試され、あるいは目的を邪魔されるということはあるのかもしれない。インドでは、グルは(例えば弟子の身体に触れることで)積極的に弟子のカルマを引き受けるという思想がある。私が知り合ったあるインド人は、自分のグルは弟子たちのカルマと汚れを引き受けて早く世界したとその偉大さを誇らしげに語っていた。そう考えると、むしろ身近な隣人からの穢れの伝染を意識して対処することは重要な修行過程と考えることができる。またそこまで至らなくても、修行の邪魔自体が修行に必須の過程であり、そうした困難に向かい合うことが修行そのもの(苦行)といえるのかもしれない。病や困

難などをもたらす邪気も実は修行の協力者なのかもしれない。インドのアシュラムでは、尾てい骨を物理的に刺激するような修行法や、激しい火の呼吸の修行法もとられていたが、いずれにせよクンダリニーヨーガや瞑想などのこうした覚醒技法は、不動明王などの男性的なエネルギーのマスターによる霊的な防御法や霊的な危機の対処法を先んじて学び身に着けたうえで、その後慎重に行う必要があると筆者は考えている。

そして、おそらく邪気とは物質に近い、姿かたちの比較的はっきりした(境界をもつ自律的で)荒いエネルギーではないか。だからこそ似た粗いエネルギーや音や線香の煙などの3次元的な要素に反応するとされるのではないか。こうした思想をもとに、癖の強い音や煙を併用し杖や棒や錫杖などを用い体内の邪気を局部的に焦し攻めにしたり、ひっかきだしたり、たたき出すというやり方がとられているのであろう。邪気をうち砕いたり燃やしたり追い払うことについては、クンダリニーの覚醒技法以上に論考が少なく研究が遅れている領域であり、それは密教的な内容で秘密とすべき事柄だからなのかもしれないが、そうした制限に配慮しつつ、文化人類学的な観点から今後の研究テーマとした。クンダリニーの覚醒については、医師や研究者による統計的な研究も一定程度存在するところ、その障壁の対処について先行研究文献が存在しない。妖怪や魍魎魍魎などと言表されてきた邪気については民俗学や文化人類学的な研究対象とはなっても、クンダリニーの障壁(クンダリニー症候群)として医学的な研究対象とはなっていない。なお、この邪気を払う身体技法に関しては、東洋医学の文献や、道教や密教の古い文献のほか、西洋思想の形而上学において正面から扱われている。

私は、スピリチュアルな文献や研究のなかで、外在的な力である邪魔の側面に関しては従

来全く関心も知識もなかったので、そうした分野について怪しい内容と感じてきた。結局、私の周囲にいた数名の著名なグル、清々しい精妙な悟りのエネルギーを注いでくれるヨーガのグルたちは、こうした修行上の邪気や緊急事態の対応をよく知らず、万人万物を愛しなさいと教えてくれた。邪気だからといって払い除けることはよくない、自分の一部として愛して受け入れなさいなどとアドバイスをされたこともあり、そうしたアドバイスを半年程度実践してみた。しかし、私は圧迫される感覚の進行を許し続け無防備で過ごすことになった。その後いったん侵入を許してしまった邪気（冷え性）を払い除けて、事後的に浄化するためにはたいへんな苦勞をした。ただ、まずは邪気にも愛を注ぎそれでも邪気の侵攻が収まらなかったという経緯は、後々自分がしていることは正当な防衛や反撃だと感じるための理由となった。このあたりの対応は、各人の価値観による判断になると思う。

私はある師匠（グル）にかなり長く師事してきた。このインドのグルは、クンダリーニの浄化について大変な導きの力をもっていたことは確かだと私は感じていた。このグルのまもりがあれば修行に危険はなく安全であると私は教えられてきたが、実際には悟りの微細な聖なるエネルギーの恩寵で粗い邪気の侵攻を防ぐことはほとんどできず、そのまましばらくは私の師匠のいうことを聞いていたが、状況は悪化し埒が明かず新たに指導者を探さねばいけないと感じた。師匠だからといって、魂の暗闇の多彩な経験、魔との対面や格闘を知っているとは限らないため、師匠のいうことをなんでもうのみにしていいのか今からすれば疑問であり、自分に合った師匠を探すことが一番大変だというニランジャナ先生の言葉を私は何度も思い出した。霊的な指導者は常に絶対的な言い方で語るものだが、自分にわからないことはわからないと正

直にいうべきであり、クンダリーニについて憶測で助言をすることは避けるべきであるとも感じている。クンダリーニは、その松明のような炎によって、邪魔や困難な状況を引き寄せると同時に、自分に合った師をも引き寄せ、師を探す旅へと私たちを導くようであり、結局は、師匠のいうことを理解しながらも、最終的には自身のクンダリーニに誘導される（そうしないと緊急事態を招く）と感じている。過度に自己本位にならぬよう、教えとのバランスをとりながら修行を進めることは困難だが重要だと感じた。

なお、臨死体験者にクンダリーニ覚醒が起きていることを疑わせる研究からしても、クンダリーニ覚醒を目指す場合は苦行が向いており、クンダリーニがすでに覚醒している場合、生死をさまようような苦行は避け、より穏やかな修行のみで十分ではないかと私は感じている。密教や日蓮宗の修行法はクンダリーニ覚醒と浄化の双方と関わりがあると私は考えている。また、詳細は稿を改めるが、現在、常葉大学の研究費で法具、チベットンボウルやティンシャを購入し、その音響にも浄化の作用があるのかどうか自験をしている。そして、以前私が邪気について未経験の時に学んでいた西洋系の身体技法（冷え性もなく元気だった当時、私にはその価値がわからなかった）を学びなおした。これは、カバラやバニシングリチュアルに関する体系的な技法であり、アイスランド出身のカバリストであるグッドニー氏や中込英人氏が公開したものである。そして、クンダリーニの覚醒者である Sukhendu 博士（インド、コルカタ）などを新たに探し、自らの浄化をすすめるクンダリーニの力を増すことでほぼ邪気の問題は解消へと至り現在に至っている。しつこい邪気にまわりつかれることで、結果として私は邪気を払い除ける力をつけ、またクンダリーニの覚醒が不十分であることを知って新たな覚醒者の師匠

に出会い、覚醒の度合いを高めることができた（そうする必要があった）わけである。

おわりに

不可視の世界にも段階的に様々な次元があることは例えばカバラをはじめとした形而上学が示しており、物質世界もそれら世界の一つの過程、段階に過ぎないと考えられているが、それらのすべての領域をマスターしなければ、根源的な悟りの世界へ安定的に足を踏み入れることはできないのではないかと。ショートカットの悟りは持続性を欠いて一時的なものになるのではないかと。

クンダリーニーの障害物には、過去の自らの因縁、カルマ（あるいはトラウマ）というだけではなく、もろもろの外因もある。そして、イダーとピンガラーの修行上のバランスを含めて、自身が整っていないことが、やはり外的な障害物を乗り越えにくくさせている。修行の道には、しばしば民俗学における様々な悪鬼や霊魂などと象徴されるようなエネルギー的なブロックが存在し、修行が進むほどにかえって邪魔をしてくるのだが、そうした障害物によって何度も自分に立ち返る必要性が出てくる。

私の経験では、クンダリーニー上昇に対して邪魔が入った感覚の軽快には長い時間と労力がかかった。クンダリーニーの覚醒、対処法としては、一般的にヨーガのみが知られているだけであるが、ヨーガだけやっていればうまくいくということではなかったのである。こうしたバランスの良い情報がない社会的状況だから、クンダリーニー覚醒による苦痛を訴え続ける人々があるとを絶たないのではないかと。クンダリーニーの上昇には、一見無関係に見えるような事柄、粗大な次元の領域を扱う身体技法の応用が欠かせないのである。そして、この邪魔を払いのけ乗り越えるプロセスでは、それを受け身に師に払っ

てもらっただけでは足りず、払いのける能動的な力＝修行におけるアウトプットの力を自らが身につけなくてはならないと私は考えている。将来的にもいつ何時、霊的な緊急事態に遭遇するかはまったくわからないものであり、いつまでも師が健在とは限らないし、また師に自らの緊急事態のすべてがわかるというものでもなく、依存するわけにはいかないからであり、また、それがイダーとピンガラーの均衡を図ることになるからである。

振り返ってみると邪魔が入ること自体が、グルにサレンダーして従う受け身の修行に偏り、自ら能動的に気を発して払っていくという態度が欠けていたことに気づききっかけになり、魔との遭遇自体が能動的、男性的に払い除ける力を増すための必要な修行プロセスだったのではないかと振り返って感じている。

『草枕』ではないが、義理を欠けば角が立ち、ねたみや嫉妬により自分の仕事や生活を邪魔されることはこの世の常であり、悟りの修行においても、現実に近い粗い次元では、そうした義理人情の沙汰があったとしても不思議ではなく、またそうした課題、問題を通じて、人ははじめて自らのアンバランスに気づいてバランスを取り戻していくのではないだろうか。

修行の終盤で釈迦が6年にわたりマラーの攻撃、邪魔に遭遇したように修行のプロセスにおける危機、邪魔は直接的な理由がなくても起こりうる。現実社会では危機管理が重要視されるが、スピリチュアリティにおける危機管理も重要である。あらかじめ修行上言い伝えられている典型的な危機に対応できるように自らが、外部からやってくる邪気を払い除けるといってアウトプットの技法や力を身につけておくことはきわめて重要であると考えている。内面へと向かう瞑想や座禅だけでは、邪気を煩惱として無視できるレベルであればよいが、白隠禅師の禅病のような邪気が関係した深刻な状態か

ら回復することは困難であろう。

初期仏教で重視されているような戒律を意図して守った態度や生活が（他者へ優しくするというよりも自らのために）重要であるが、私の経験からは、クンダリーニの障害物の解消について自力には時間的にも限界があり（今生で覚醒を目指すのであれば特に）、師や神の恩寵がなければクンダリーニの覚醒や上昇には容易にはたどり着かないと感じている。私の努力不足はもちろんだが、今回の人生という限られた期間で、クンダリーニの上昇に取り組もうとすれば、先人の業績と恩寵にすがらざるを得ず、そこへとたどり着く長い道のりが自力なのではないかと思うものの、他力に依ってはい、自分の意志の強さが損なわれる、グルやパワースポットなどの環境に依存しない悟りこそが永続的なものという考えにも惹かれる。インドでは、あえて穢れた場所、暗い森の中や夜の墓場で瞑想する修行者もいて、彼らは悟りではなく邪術の目的をもってそうしているとする解釈もあるが、瞑想しづらいような不浄な環境でも内面の悟りを安定させ維持することを目指し、自らの強い意志でわざと困難な環境を選んで瞑想しているとすれば、彼らの悟りは環境に左右されない本物だろうと考えたりした。（衆生救済のために世俗へ下りて瞑想するのだというから、個人的な悟りという考えは彼にはないのかもしれない。）ただ、ヨーガの伝統においてもグルにまず悟りに導いてもらい覚醒ができた後には、その弟子は自ら市中のもっとも不浄な場所へ行って瞑想し、環境の浄化に努めることはあるのだという。

繰り返しになるが、邪気と出会わずに幸運に悟りを成就することができればよいが、魂の暗闇は通らざるを得ず、遅かれ早かれ出会う宿命だとすれば、自らがより粗大な気を出して払い除ける動的な、アウトプットのための身体技法、修行が必要だろう。この動的な修行はマイ

ンドを使うものになり、能動性、積極性、男性性を強めるが、自己を見つめ執着を手放す静的な修行と同時に行うことは可能であり、それらのバランスをとってゆくことが魂の暗闇を通過するにあたり重要ではないだろうか。悟りを目指すものには、一見無関係に思われるような、物質に近い不可視の次元（哲学的に言うエーテル、アストラルなどの世界）、あるいは社会的次元の理解、扱い、それらのマスターもまた必要であろう。

付記

本稿は、2021年10月、常葉大学での日本トランスパーソナル心理学／精神医学会大会での報告と質疑応答の内容を踏まえたものである。

注

- 1 このクンダリーニの覚醒した師匠は苦行に相当するような日常生活を経て、真言を唱える修行に導かれ、自然にクンダリーニが覚醒し、それらを魂の導きだと感じているそうである。

参考文献

- 仏教伝道協会編『仏教聖典』仏教伝道協会。
大宮司信(1995)『憑依の精神病理』星和書店。
Durkheim, (1912). *Les Formes Élémentaires de la Vie Religieuse*, Librairie Générale Française, Paris. (=1941, 1942, 古野清人訳『宗教生活の原初形態』上・下, 岩波書店)
合田秀行(2012)「クンダリーニ体験に関する諸相」『トランスパーソナル心理学/精神医学』11, 日本トランスパーソナル心理学/精神医学会。
Hannah (1964). *I Never Promised You A Rose Garden*, Holt, Rinehart and Winston. (=1971, 佐伯わかこ, 笠原嘉訳『デボラの世界』みすず書房)
花園大学仏教学科編(1992)『禅と東洋医学』禅文化研究所。
石川勇一(2001)「縁起の法とその活用－修行、人生、心理療法における因と縁」『トランスパーソナル心理学/精神医学』20(1), 日本トランスパーソナル心理学/精神医学会。
Jessica Sophie Corneille, David Luke, 2021, *Spontaneous Spiritual Awakenings: Phenomenology, Altered States, Individual Differences, and Well-Being*, *Frontiers in Psychology*

- Jung, C., G., (1932). *Die Psychologie des Kundalini-Yoga : Nach Aufzeichnungen des Seminars.* (=2004, 老松克博 訳『クンダリニー・ヨーガの心理学』創元社)
- 柏瀬宏隆(2004)『感応精神病』新興医学出版社。
- 巻口勇一郎(2020)「クンダリニーと統合失調症の思想—デュルケム、プラトン、ユングの思想をもとに—」『トランスパーソナル心理学/精神医学』19(1), pp.50-75.
- Mauss, Marcel et Henri Hubert (1899). *Essai sur la nature et la fonction du sacrifice, L'Année Sociologiques* 2: 29–137. (小関藤一郎訳『供犠』法政大学出版局, 1983)
- 中井久夫(1998)『最終講義 分裂病私見』みすず書房。
- 中村雅彦(2003)『呪いの研究』トランスビュー。
- (2008)『祈りの研究』東洋経済。
- 中安信夫(2004)『稀で特異な精神症候群ないし状態像』星和書店。
- Paramahansa Yogananda (1946). *Autobiography of a Yogi, The Philosophical Library* (=1983『あるヨギの自叙伝』森北出版)
- Sanella Lee (1987). *The kundalini Experience, Psychosis or Transcendence*, Integral pub.
- 白川静(1987)『字訓』平凡社。
- Sukhendu Mandal, 2020, *Beyond Placebo, Harness the Power of Your Words*, Self Published at Amazon.
- Sureth and Ramachandran, Jayachander, (2013). *Effect of kundalini yoga on psychological health in young adults, Indian Journal of Positive Psychology*, 4(1), 7-13.
- Taylor, S., (2013). *The Peak at the Nadir – Psychological Turmoil as the Trigger for Awakening Experiences, International Journal of Transpersonal Studies*, vol.32.
- 藤堂明保(1963)『漢字の語源研究』学燈社。
- 横田観風(1998)『万病一風論の提唱(増補)』谷口書店。

参考ウェブサイト

<https://wakingtheinfinite.wordpress.com/>

抄録

宗教には様々なものがあり、同じ仏教でも宗派は様々だが、クンダリニー覚醒の様子、その過程も十人十色であり、その人の現在の状態に必要な修行法もそれぞれで異なってくる。そして瞑想をはじめると、QOLが改善するという実証研究も積み重ねられてきている。しかし、修行の過程でクンダリニーが目覚めれば、覚醒したクンダリニーが敵味方様々なものを引き寄せ、良いこと悪いこと含めて人生のスピードが加速する可能性がある。密教や日蓮宗では法に帰依する修行者に対する邪魔を砕き退ける祈祷がある。クンダリニーが覚醒すれば、その光と熱は他から感知され、修行者は

困難を含む様々な出来事を呼び寄せて、速いスピードで経験するようになる。邪魔が入り霊的な障害を患うのは、その人のその修行の先に達成可能な変化が見えてきているからそれを阻止しようとするのである。歴史を振り返り多くの宗教家の生涯を思い起こしてみても、彼らの人生に修行を邪魔する人物や艱難があった。白隠禅師のように修行において禅病になり、その霊的な障害が雑念として無視できないレベルであれば、それに向かい合う必要があり、そこに禅以外の浄化や厄払いのような攻撃的とも思われる修行法が生まれた理由があるだろう。このようにクンダリニー覚醒の状況が多彩であることにかんがみれば、異なった修行法、宗教宗派が生まれてきた理由が理解できる。そして、クンダリニー症候群は、日常生活を困難にするが、それを克服する過程では勤勉に内面的な過程に取り組みねばならないわけで、それ自体を修行と評価することは可能であろう。

キーワード：クンダリニー、縦の柱とよこしまな力、霊的な危機、修行におけるインとアウト

Abstract

In this paper, I will discuss various problems related to the practice of kundalini awakening, and the evil as external factors. In another words, the aim of this paper is my personal opinion on the factors causing the Physio Kundalini Syndrome. As I pointed out in my previous article (JATP, Vol.20), Kundalini is also symbolized as Goddess Shakti, who is separated from Lord Shiva at the head Chakra. She the Kundalini is said to let us experience the liberation from the dualistic delusional world (Makiguchi 2020). C.G.Jung described kundalini awakening as “the greatest adventure of his life,” and the process of training leading to liberation is not necessarily an easy and simple one, but a tough and lonely journey with many hardships. There are various barriers and blocks on this path, and it is sometimes life-threatening to overcome them. Obstacles that cause disorders such as Physio Kundalini syndrome are sometimes said to be past traumas and karma that exist in the chakras, or external evil archetypes. But there seems to be few researches on these obstacles especially from outside. In this paper, I will examine various problems including external factors in the path of kundalini awakening.

Keywords: Kundalini awakening, Vertical-rising versus horizontal-disturbing aspect, Spiritual emergency, Obstacles on the spiritual path, Ascetic practice for input and output